

会員企業探訪

革製品づくりの 確かな技術で オーダーメイド ならではの価値を追求

PELTY 木村 聡太



築100年以上の物件を改装した「PELTY」
昨年10月に移転オープンしたばかり



作業スペースには補助金で購入した機械が並び
棚に収まるのは保護紙に大切に包まれた皮革



財布をはじめとした革小物が並びショーケース
こだわりをもって大切な人に贈りたい一品



外壁の土壁を活かした粗っぽさが
並べられた革の繊細さ、美しさを引き立てる

経営理念

(技術の研鑽に懸命で経営について考えたことがありませんでしたが)

ただの職人として
目の前の一つ一つの仕事に
向き合っていくだけです。

バッグや財布などのオーダーメイド革製品の製造・販売をする「PELTY」。昨年、白濁本町の出雲ビルから末次本町に店舗兼工房を移転しリニューアルオープンした。控えめな外観の店構えだが、店内は建物の二階床部分を取り払った吹き抜けの高い天井とむき出しの古い梁、解体の時に発見されたという年代物の土壁が織りなす、一風変わった独特の雰囲気がある。ショーケースや棚には様々なスタイルのバッグや小物などのオリジナル革製品が並び、その先はすぐ製作工房につながる。木村さんは境港市出身。19歳のとき革細工職人として境港で工房を営む父親に師事し、この道に入った。

「父は職人気質の人で、とにかく生真面目で仕事もストイック。僕にはあのような生き方はできないだろうと思っていました」とふりかえるが、思い出せば子どもの頃から父親に革細工のあれこれを教えてもらい、自分で使う財布などは自作できるようにになっていたという。木村さんは中卒で社会に出てしばらくは自分のやりたいことを探す日々を過ごしたが、やはりというべきか、父親と同じ道に進むことを選んだ。

「革細工職人として社会に出たのは23歳の時です。米子にできたブティックとカフェの複合店にインストアショップとして商品を置かせてもらったことが最初のステップでした」

して注文主と相談しスケッチブックなどに形や機能などのアイデアを描きながら、質感や色味も合わせ決めていく。「僕としてはあまり必要のない意匠はぶいて、シンプルでありながらも飽きずに使っていただけるものを作りたいという思いがある」とし、スマホケースのようなものも問い合わせはあるが、長く使ってもらえないものは断ることにしているという。上質な革を丁寧な仕立てで機能ある形にする。普通に言えば10年のもつ、というモノづくりが木村さんの考えでもあるからだ。

精緻な手仕事の価値を長く

精緻な手仕事は誰でも一朝一夕にできるものではないが、一見するに地味な仕事である。コツコツとした小さな積み重ねを要する辛抱の仕事でもあると思うが、そこはどうだろうか。

「仕事に飽きたことはありません。細かい部分をきれいに仕立て上げたときなどはやはり嬉しいものです。仕立てのきれいなものは誰にも負けたくはないですね」という。

これまでも現在も一人でやってきた。そして今後もたぶん一人での仕事が続くと木村さんは言う。

「末次本町に店を出してから来店客が増え、この受注だけで手一杯。納品を半年ほど待っていたら、納品も」と忙しさを語る。半年待っても手に入れることを楽しみにする顧客がい

9年前、28歳の時には白濁本町出雲ビルに工房兼ショップを開き、米子から松江へ進出。さらに顧客層を広げ、工房のグレードアップを図ろうと今回の移転となった。

10年ものを作る工房に

木村さんの作る商品の特徴は、その精緻な造り込みにある。例えば財布の縁を見ても、外側の革が丁寧に内側に折り返されて縫製されている。これは縁返しといわれる仕立てで、この仕立て方をメインに製作している革工房はおそらく山陰では少ないという。また角の部分は菊寄せという技法が使われ、他の部分よりも薄く漉いた革のしわが端正に放射状に並ぶ様子にはなるほどとうならざるをえない。

「1.3ミリの革を主に使いますが、使う箇所やパーツによってどのくらいの厚さに革を漉くか、薄過ぎず厚過ぎず、一枚一枚の革の強さをみながら漉いていくのが肝心で、これがきれいに仕立てていくベースになる」という。移転の際に木村さんは小規模事業者持続化補助金を利用して革漉き機を替え、革を裁断するハンドプレス機、名入れに使用するホットスタンピングマシンを導入した。いずれも作業のスピードアップ、品質向上に資する設備である。

主力商品はカバンと財布。カバンはフルオーダー、財布はセミオーダーで受注する。デザインについては、基本と得する。

「当店で作ったものは物理的に可能であれば修理をしています。長く使うとどうしても擦れる部分は破れてしまふようなこともあります。表革やパイピングを交換したり…。財布やバッグのボタンのバネも弱くなるので、それは何度でも無償で交換させてもらっています。やはりできる限り長く使ってほしいから」と自ら手掛けた仕事を全うしたいとの責任感を語る。一方で受注の生産に追われているが、自分の好きな商品を作り店頭を個性豊かにディスプレイしたいの思いも持つ。

ストイックで生真面目、職人気質の父親のようにはなれないとインタビューの初めに語ってもらったが、その言葉とはうらはら、同じ道をしつかりと歩んでいるようだった。



■PELTY
〒690-0843 島根県松江市末次本町7
TEL&FAX0852-67-1315
【営業時間】12:00~19:00
【定休日】火曜日
【Web】http://pelt.jp/
【Facebook】https://www.facebook.com/pelt.jp